

〈一般投稿論文〉[研究論文]

随意的な主語助動詞倒置が適用された *as* 節の文脈的機能 とその特徴

—倒置現象と文脈的機能のインターフェイス—*

徳 永 和 博

大阪大学大学院

This paper aims to propose an overlooked discourse function of optional subject-auxiliary inversion (SAI) in *as*-clauses (e.g. ... , *as do I*). Although many studies have demonstrated the factors of optional SAI, little research has been conducted on the kind of effect that SAI in *as*-clauses have on the subsequent context. A corpus analysis shows that when SAI is applied, subject noun phrases in *as*-clauses tend to appear in subject or direct object positions in the successive sentences. Finally, it is argued that *as*-clauses with non-canonical word order have a discourse function of introducing their subject as a topic for the context that succeeds the relevant *as*-clauses.

キーワード： Optional Subject-Auxiliary Inversion, *as*-clauses, discourse function

1. はじめに

本稿の目的は、随意的な主語助動詞倒置 (Subject-Auxiliary Inversion、以下 SAI) が適用されている *as* 節を対象とし、後続文脈を踏まえた分析を通じて、当該 *as* 節がその主語名詞句をトピックとして後続文脈に導入する文脈的機能があることを明らかにすることである。

as 節内の SAI は、荒木・安井編 (1992: 756) でも記されているように随意的に適用される。また、同等比較用法の *as* や助動詞が複数生起する統語環境でも用いられるが、¹ 本

* 本論文の執筆に際し、有益かつ建設的なご助言を下された査読委員3名の先生方、そして、本稿の草稿段階から継続的に貴重なご指摘を下された岡田禎之先生に心より感謝を申し上げます。本論文では COCA のフルテキストデータを用いているが、筆者は立命館大学大学院 (言語教育情報研究科) の研修生であるため、言語教育情報研究科のコパスサーバーへのアクセスができ、COCA のフルテキストが利用できる立場にあることを付記しておく。なお、本稿における不備や誤りは全て筆者の責任である。

¹ 例えば以下のような例が該当する。

稿では (1) のように as 節内に助動詞が 1 つ生起し、1 語の固有名詞または人称代名詞を主語として持ち、コンマを伴い節末に現れる as 節を扱う (本稿における下線は、特に断らない限り、すべて筆者によるものである)。

- (1) a. Grace knew this was a high probability outcome, as did Monk.
(COCA: fiction: W. Chu 2015 *Time Salvager* [Tor Trade])
- b. His friends were rich dipshits, probably private school kids, as was he.
(COCA: fiction: S. Isaacs 1996 *Lily White* [Harper Collins])

本稿の構成は、まず 2 節で随意的な SAI の要因や、SAI が適用された as 節の文脈的機能に関する先行研究を確認し、問題点を明らかにする。3 節で本稿の研究方法を述べ、4 節で固有名詞を主語として含む場合と人称代名詞を主語として含む場合の as 節を、後続文脈での格の取り立てという観点から検討する。5 節では、随意的な倒置が適用された人称代名詞を主語に持つ as 節には、Lambrecht (1994) の “topic-promoting construction” や Huddleston and Pullum (2002) の場所句倒置と同様の機能が観察されることを指摘する。6 節は結論である。

2. 先行研究

2.1. 随意的な SAI の諸要因

as 節内の SAI について代表的な要因とされるものは、as 節内の主語名詞句の重さと焦点である (大文字表記は Culicover (2013) によるもので強勢を示す)。

- (2) a. It would be agreeable to pass it by, as have many inquiries into determinism pertaining to decisions and actions. (Biber et al. 1999: 919)
- b. Sandy has been very angry, as has {Leslie/HE}.
(Culicover 2013: 106 より一部抜粋)

Biber et al. (1999: 919) は (2a) のように as 節の主語名詞句が重い場合に倒置が適用されると分析している。また、Culicover (2013) は (2b) の as 節を ‘focus inversion construction’ と呼んでおり、節末の名詞句には強勢や焦点が置かれると述べている。本稿では、Quirk et al. (1985: 1398) の用語を用いて、便宜上これら 2 つの要因を End-weight および End-focus と呼ぶ。

(i) Sandy would have been very angry, as would have been all of the people who invested in the project. (Culicover 2013: 106 より一部引用)

2.2. SAI が適用された as 節の機能

(1) のような as 節に限定した SAI の機能を扱った研究は、著者の知る限り過去にほとんど例がないため、ここでは SAI が適用された as 節の機能を一般的に扱った先行研究を検討する。これらの先行研究の主張は、SAI のサブタイプである (1) にもあてはまるものだからである。まず Green (1980) は引用句倒置や場所句倒置などの様々な倒置構文が持つ機能を提案しているが、(3) の as 節については “I haven’t the least idea what is functional about inversion” と述べ、その機能を十分に記していない。

- (3) a. It represents the business interests of Germany as no other organization does.
 b. It represents the business interests of Germany as does no other organization. (Green 1980: 594, fn. 8)

一方、Dorgeloh (1997: 115) によれば、(4) の predicative inversion の構文は前置した要素が参照点となり、後置した主語名詞句を談話内のトピックに変更する ‘topic change’ の機能を有するが、(5) のような as 節内の SAI は単に倒置した主語に焦点が当たただけで “They do not have the same function of directing the focus of attention from one discourse item, or a ground, to the next” (Dorgeloh 1997: 115) とし、as 節内の SAI には談話内の ‘topic change’ に関与する機能は見られないとしている（下線は Dorgeloh (1997) による）。

- (4) More important than Japanese concessions, many business executives on the trip believed, was the event’s symbolism—a point that even the disappointed Big Three chairmen underscored. (Dorgeloh 1997: 115)
 (5) Maitland as Superintendent of Airships appears to have been left on the fringes as was Masterman after he transferred from the Navy to the R.A.F. [...]. (Ibid.: 116)

大竹 (2016: 4-7) は (6) の as 節について、as 節が主節に関連する補足情報を伝える機能を持つと分析している（下線は大竹 (2016) による）。

- (6) After nine days in jail, Mr. Sirkar was deported, as were hundreds of other workers. (大竹 2016: 6)

大竹 (2016: 6) によれば、(6) の as 節の先行文で Mr. Sirkar についての情報が述べられた後に、「Mr. Sirkar(ママ) 以外の労働者たちも同様であった」という主節についての補足情報が提示されている。補足情報を示す as 節に対してはあくまで主節の情報が主であり、「as 節内の情報が後続する談話の話題となって話の筋が新たに作られることは通例ない」(大竹 2016: 7) と述べている。

2.3. 先行研究の問題点

これまで SAI が適用された as 節は、End-weight や End-focus によって倒置が生じた構文であり、他の倒置構文と違い、談話のトピックに関与する機能は持たないとされてきた。しかし、この分析は SAI が適用された as 節の倒置の要因や文脈に及ぼす機能を十分に捉えきれていない。例えば、(1a) の後続文脈を示した (7) では、as 節内の主語名詞句 Monk が後続文の主語位置で現れ、as 節内の情報が談話の話題として後続している。² こうした例を見ると、as 節に適用される随意的な SAI は as 節内の主語名詞句を談話のトピックに取り立てるために適用されているのではないかという疑問が起こる（例文中の囲みは取り立てられている要素を示す。以下同様。）。

- (7) Grace knew this was a high probability outcome, as did Monk. That's why, with the High Marker's propulsions disabled, he had asked for her authority to execute a planet cracker missile at such short range. (= (1a))

この問題を明らかにするために、本稿では 3 節で述べる手法を用いて、随意的な SAI が適用された as 節には、その主語名詞句に後続文脈の談話のトピックとしての地位を与える文脈的機能があり、End-weight や End-focus に加えて、その文脈的機能が倒置の第 3 の要因として考えられることを主張する。³

3. 研究方法

3.1. データの収集方法

本稿で検討する例は、オンライン上で利用可能な The Corpus of Contemporary American English (以下、COCA Online) および COCA のフルテキストデータ (以下、COCA Full-Text) より収集したものである。⁴ よって、本稿で扱うのは現代アメリカ英語のデー

² as 節と同じく随意的な SAI が適用される than 節にもこの現象は観察できる。ここでは例を挙げるだけに留め、(i) のような than 節の文脈的機能については別稿に譲る。

(i) [...] For instance, I wanted to pursue sexual topics far more than did Rafiq. She [= Rafiq: KT], as an "insider," felt that going into some of this material would be trespassing on the women's privacy and dignity; [...] (<http://ark.cdlib.org/ark:/13030/ft4489n8s2/>) [最終アクセス日：2019年5月3日]

³ 「トピックとしての地位を与える」や「第3の要因」という表現は本稿の主張を汲んで頂いた査読者の先生方からのご指摘を踏まえたものである。筆者の意図するところについて建設的なコメントを頂き感謝申し上げます。

⁴ COCA Online と COCA Full-Text を併用した理由は、滝沢 (2017: 23) が指摘するように、前者の場合はコーパス製作者である Mark Davies 教授が設定した検索方法しか利用できず、テキストデータそのものを処理することができないからである。この点を補うために、柔軟なテキスト処理

タである。⁵ 例文出典では COCA とサブコーパスに加え、(分かる場合は) 著者、年代、タイトル、さらに角括弧で囲み媒体を示す。

コーパスからの抽出方法は、COCA Full-Text を対象に、(8) に示したような正規表現を組み合わせた検索式を用いて、as、主語名詞句、助動詞が共起しているデータを抽出した。具体的には、コンマが as の前に現れ、be 動詞の屈折形 (am/are/is/was/were)、do の屈折形 (do/does/did)、法助動詞 (should/could/would/shall/might/will/must/can/may)、have の屈折形 (have/has/had) を含んだ as 節で、ピリオドで終わっている連鎖を抽出した。その後、COCA Online で as 節が出現している文脈を確認した。なお、同等比較の例や、譲歩用法など倒置構造と通常語順の随意性が認められない環境で用いられているものは非該当例としている。検索に用いた検索式は以下である (本稿では検索対象とするデータを in_file と表記する)。

(8) a. as+ 固有名詞 +be 動詞の屈折形の検索方法

```
perl -ne 'while(/\b\, as ([A-Z][a-z]+) (w(erelas)lareislam)\./g) {print "$&\n"}' in_file
```

b. as+ 固有名詞 +do の屈折形の検索方法

```
perl -ne 'while(/\b\, as ([A-Z][a-z]+) d(oeslidlo)\./g) {print "$&\n"}' in_file
```

c. as+ 固有名詞 + 法助動詞の検索方法

```
perl -ne 'while(/\b\, as ([A-Z][a-z]+) (should|could|would|shall|will|m(ight|ust|ay)|can)\./g) {print "$&\n"}' in_file
```

e. as+ 固有名詞 +have の屈折形の検索方法

```
perl -ne 'while(/\b\, as ([A-Z][a-z]+) (ha(vels|d)\./g) {print "$&\n"}' in_file
```

(8) の検索式は、1 語の固有名詞を主語に持つ as 節の通常の語順を検索するものである。倒置した例を検索する際には、([A-Z][a-z]+) の部分とその後の部分 ((8a) であれば、(w(erelas)lareislam) の部分) を逆にして検索している。また、人称代名詞を検索する場合は、([A-Z][a-z]+) の部分を (they|shelyou|wel|he|I) にした検索式を用いている。すなわち、本稿では主語が 1 語である as 節を対象としている。1 語の固有名詞もしくは人称代名詞を主語に持つ as 節に限定するのは、できるだけ End-weight による倒置を排除する

が可能な COCA Full-Text を利用した。しかし、フルテキスト版では著作権保護の目的で 200 語ごとに 10 語ずつ伏せ字が施されており、文脈の確認が難しいため、文脈を見る際は COCA Online を利用した。

⁵ 変種の扱いに関して、貴重なご意見を査読者の一人から頂いた。感謝申し上げます。

ためである。End-focus については排除するのが困難だが、この要因以外の動機づけによって SAI が適用されていることを 4 節で考察する。

3.2. 本稿で扱うデータ

3.2.1. 固有名詞を主語名詞句として含む場合

本稿で対象とする固有名詞を主語として含む as 節の総頻度は、表 1 および表 2 の「as 節数」の合計である。表 1 は倒置が適用されていない例（以後 Non_SAI_as）であり、表 2 は SAI の例（以後 SAI_as）である。なお、(8) の検索では非該当例も抽出してしまうため、目視で確認し排除している。表 1・表 2 それぞれの「as 節数」から、比例配分法を用いた層化無作為抽出法によって 50 件取り出したものが「抽出データ」である。⁶ これが本研究で検討するデータである。⁷ これは表 1・表 2 にある「as 節数」の各層の比率に応じて決定している。2 つの表の「as 節数」を見れば明らかだが、SAI_as の方が合計 123 件となっており、Non_SAI_as の 81 件よりも総頻度が高い。これは固有名詞を主語に持つ場合、SAI_as が無標の構文であることを示している。⁸ この点については 4.1.2 節で言及する。

表 1：Non_SAI_as のデータ（固有名詞）

層	as 節数 (%)	抽出データ
Academic	12 (7.4%)	7
Fiction	16 (9.8%)	10
Magazine	26 (16%)	16
News	18 (11.1%)	11
Spoken	9 (5.5%)	6
合計	81 (50%)	50

表 2：SAI_as のデータ（固有名詞）

層	as 節数 (%)	抽出データ
Academic	10 (4%)	4
Fiction	34 (13.8%)	14
Magazine	26 (10.5%)	10
News	34 (13.8%)	14
Spoken	19 (7.7%)	8
合計	123 (50%)	50

⁶ 査読者の一人からランダム・サンプリングについてご指摘があった。当初、単純無作為抽出法を用いてデータを作成していたが、この方法では Hand (2008: 52) や Brezina (2018: 15) 等で指摘されているような代表性の問題があるため、本稿ではこの問題点を踏まえ、COCA の代表性を担保するために比例配分法を用いた層化抽出法を用いて従来のデータを修正した。また、ここでは COCA のサブコーパスを層として設定している。しかしながら、本稿の調査方法に問題がないわけではない。例えば、固有名詞を主語として含む場合と、人称代名詞の場合の例を 50 例で統一していることが統計学的に妥当かどうかには議論の余地がある。これがどれほど妥当な方法かは考慮すべきことであると思われる。

⁷ 本稿で使用するデータの COCA Online および COCA Full-Text への最終アクセス日は 2019 年 9 月 11 日である。

⁸ 査読者の一人からのご指摘により無標性・有標性についての観点から本稿での分析を豊かにすることができた。査読者の先生に厚く御礼申し上げる。

3.2.2. 人称代名詞を主語名詞句として含む場合

人称代名詞の場合も固有名詞の場合と同様の処理を行った。この場合、SAI_as の総頻度は Non_SAI_as よりも低く、SAI_as の方が有標な構文と考えられる。

表 3：Non_SAI_as のデータ（人称代名詞）

層	as 節数 (%)	抽出データ
Academic	9 (2.7%)	3
Fiction	56 (17%)	17
Magazine	22 (6.7%)	7
News	10 (3%)	3
Spoken	67 (20.4%)	20
合計	164 (50%)	50

表 4：SAI_as のデータ（人称代名詞）

層	as 節数 (%)	抽出データ
Academic	4 (3.6%)	4
Fiction	18 (16.3%)	16
Magazine	11 (10%)	10
News	7 (6.3%)	6
Spoken	15 (13.6%)	14
合計	55 (50%)	50

3.3. 後続文の分析方法

3.3.1. 具現している格の分類と特徴づけ

本稿では、as 節内の主語名詞句が後続 5 文までの文脈内で主格、目的格、所有格、斜格のいずれの格で現れているかを分類する。また、後続文を主節か主節以外の節かで分け、格の具現が見られない場合は取り立てなしとしている。ここでは上記 4 種類の格の具現を分析対象としているが、as 節の文脈的機能を検証するにあたり、Givón (1990) で提案されているトピック性の度合いに関する順序付けを参考に、トピック性の高い格とそうでない格を分類する。

(9) Topicality and grammatical case-roles

SUBJECT > DIRECT OBJECT > OTHERS (Givón 1990: 901)

(9) では、主語と直接目的語が他の項目よりも高いトピック性を有していることが示されている。このトピック性の度合いを基に、Givón (1990: 902) は主語を ‘main topic’、直接目的語を ‘secondary topic’、他の文法役割を持つ要素を ‘non-topic’ であると分類している。本稿では、この分析を基に、主節に現れた主格や目的格をトピック性の高い格（「主・目」）としてまとめ、他方、主節や主節以外の節（that 節や to 不定詞節など）に具現している所有格や斜格、あるいは主格・目的格であっても、主節以外の節に現れた場合はトピック性の低い格（「その他」）として分類している。⁹

⁹ トピック性を分析するうえで格を基準としている点に関して、査読者の一人から文法役割での分析が一般的ではないかとのコメントがあった。また、「他動詞主語 (A)、自動詞主語 (S)、直接目的語 (DO)、間接目的語 (IO)、斜格相当の表現 (OBL)」で「それぞれ情報性が異なるため、これらが一括りにされている本稿の分析は、より詳細な分類が必要なのではないかとのご指摘を頂いた。

3.3.2. 格の取り立ての分析単位と as 節の後続文脈の分析範囲

格の取り立ての分析は、Givón (1983) や Myhill (1992) を参考にし、節を基本的な分析単位としている。後続文の分析範囲は、先述のように as 節を含む文の後続 1 文目から 5 文目までの文脈である（以下、後続 X 文目を SX と表記する）。ただし、段落の切れ目や話し手が切り替わる場合は、そこを検討する後続文脈の終点と定めている。¹⁰ 例えば、S3 で段落が変わっていたり、話し手が変わっていたりした場合は、S2 までを分析対象の範囲としている。また、どこで格が取り立てられるかは節単位で見ているが、S1 や S2 という時の S は、従属節を含む場合、主節と合わせて 1 つの S とする。(10) は SAI_as (固有名詞) の spoken の例だが、S3 で話し手が変わっているため分析範囲は S2 までである。

- (10) LUDDEN: In fact, foreign reporters do criticize the Palestinian Authority, as does Hass. [S1] Palestinian officials twice threatened to expel her for writing about alleged human rights abuses. [S2] At a recent press conference in Ramallah, she badgered Palestinian security chief Jebril Rajoub. [S3] Mr-JE-BRIL-RAJOUR: (Foreign language spoken) ...
(COCA: spoken: 2001 *Profile: Israeli journalist Amira Hass* [NPR_Sunday])

なお、等位接続詞で文が 2 つ連結している場合は、その前位節と後位節をそれぞれ独立した節と認定しており、等位接続された箇所全体を 1 つの文としていない（例文中の KT は筆者による補足箇所である。）

- (11) We have Red Hat on our price list, as Dell does. [S1] Dell has Solaris on their price list, as we do. [S2] We have a complete Web services stack. [S3]

本稿では Givón (1990) の分析を参考に、どのような格で具現しているかに注目した分析を行ったが、ご指摘の通り、トピックに関わる現象を複雑な言語事実に照らして分析するには、より細かい分類が必要であると思われる。この点に関しては、細かく分類した場合にも統計的に有意差が出るかどうかを今後確認していきたい。査読者の先生からの示唆に富むコメントおよび参考文献の情報提供に感謝申し上げます。

¹⁰ 査読者の一人から話し手が切り替わる場合も同じトピックが続く事例があるのではないかとのご指摘があった。例えば、以下の例がこれに該当すると考えられる。

- (i) REGINA-CARTER: I think they were there, as was Paganini. I think he was there too.
ROSE: Nicola Paganini was there?
REGINA-CARTER: Yes, saying, its [sic] about time.

(COCA: spoken: 2003 *60 MINUTES II*)

ここでは話し手が Regina から Rose に代わっており、先行発話で倒置した Paganini が Regina の発話内で主語としてフルネームで現れている。本稿では話し手が変わった場合でもトピックが続く例が見られるかどうかは検討していないため、今後の課題としたい。

[They] [=Dell: KT] have to go out and [S4] buy it. [S5] I'm not quite sure how it's moving away from us. //

(COCA: news: 著者不明 2003 *On the Record: Scott McNealy* [San Francisco Chronicle])

(11) の S3 から S4 では等位接続詞 and が使われているが、節同士が連結されているため、2つの独立した節として認定している。

3.3.3. 格の取り立ての計上について

本稿では2段階のプロセスを踏んで格の取り立て数を計算している。まず、表1から表4のそれぞれの as 節について、S1 から S5 までの格の取り立ての分布表を作成し、取り立ての項目を「主格あるいは目的格」、「その他」、「取り立てなし」の3種に大別して計上した。表5は(11)の取り立てを計上したものである(表中の「主・目」は「主格あるいは目的格」での取り立てであり、 ϕ は「取り立てなし」を示す)。

表5: (11) の各文の取り立て分布

文	主・目	その他	ϕ
S1	1	0	0
S2	0	0	1
S3	1	0	0
S4	1	0	0
S5	0	0	1

取り立て分布を調査した後、表1から表4それぞれの as 節の取り立て分布をまとめ、S1 から S5 まででどのように取り立てが推移しているかを確認した。例えば、SAIが適用された固有名詞を持つ as 節のすべての取り立て分布をまとめると以下ようになる。

表6: SAI_as(固有名詞) のデータ全体の取り立て分布

取り立て項目	S1 まで	S2 まで	S3 まで	S4 まで	S5 まで
① 主・目	9 (17.6%)	9 (17.6%)	11 (21.6%)	11 (21.6%)	11 (21.6%)
② その他	10 (19.6%)	11 (21.6%)	12 (23.5%)	12 (23.5%)	12 (23.5%)
③ ϕ	32 (62.7%)	31 (60.8%)	28 (54.9%)	28 (54.9%)	28 (54.9%)
合計	51 (100%)	51 (100%)	51 (100%)	51 (100%)	51 (100%)

表6で示されているように、S1 から S5 まで文脈を広げていくと、取り立ての合計数はS1 から S5 にいくに従って純増し、「 ϕ 」は「主・目」もしくは「その他」で取り立てがある度に次第に減少する。

本稿では、あくまで S1 から S5 までで取り立てがあったテキスト数を計測しているの

であって、任意の格で何回取り立てられたかを計測しているわけではない。そのため、例えば表 5 のように S1、S3、S4 で主格の取り立てが何度も見られる場合であっても、取り立て数は 1 件とカウントし、3 件としていない。また、SAI_as(固有名詞) のデータ数が 50 であるのに、表 6 の合計が 51 となっているのは、①と②の取り立てを別々にカウントしており、テキスト数が抽出データの合計数を超えるためである。本稿では S1 から S5 までの取り立てを上記のように計上しており、その結果を基に 4 節以降で議論する。

4. 考察

4.1. トピック性の度合いの高い格の具現と取り立てなしとの比較

4.1.1. 調査①：as + 固有名詞 + 助動詞の場合

まず as + 固有名詞 + 助動詞の連鎖を対象に、後続 5 文目までの格の具現がどのような分布になっているのか調査を行った。ここで扱う固有名詞は、Marx や Bruce のように 1 語の固有名詞である。人名がほとんどだが、一部には Madrid のような地名 (Non_SAI_as では 50 件中 4 件、SAI_as では 50 件中 6 件) や Protestantism などの用語 (Non_SAI_as のみ 50 件中 3 件)、Microsoft などの会社名 (SAI_as のみ 50 件中 1 件) も含まれている。以下、表 7 は Non_SAI_as の S1 から S5 までの格の取り立て分布をまとめたものであり、表 8 は SAI_as の分布である。

表 7：Non_SAI_as(固有名詞) の S5 までの取り立て分布

取り立て項目	S1 まで	S2 まで	S3 まで	S4 まで	S5 まで
① 主・目	5 (9.6%)	6 (11.3%)	6 (11.3%)	6 (11.3%)	6 (11.3%)
② その他	9 (17.3%)	10 (18.9%)	10 (18.9%)	11 (20.8%)	11 (20.8%)
③ φ	38 (73.1%)	37 (69.8%)	37 (69.8%)	36 (67.9%)	36 (67.9%)
合計	52 ¹¹ (100%)	53 (100%)	53 (100%)	53 (100%)	53 (100%)

表 8：SAI_as(固有名詞) の S5 までの取り立て分布

取り立て項目	S1 まで	S2 まで	S3 まで	S4 まで	S5 まで
① 主・目	9 (17.6%)	9 (17.6%)	11 (21.6%)	11 (21.6%)	11 (21.6%)
② その他	10 (19.6%)	11 (21.6%)	12 (23.5%)	12 (23.5%)	12 (23.5%)
③ φ	32 (62.7%)	31 (60.8%)	28 (54.9%)	28 (54.9%)	28 (54.9%)
合計	51 (100%)	51 (100%)	51 (100%)	51 (100%)	51 (100%)

¹¹ 調査対象のテキスト数の 50 件よりも合計が増えるのは①でも②でも取り立てが同時に認められるテキストが存在していることによる。表 8、表 9、表 10 も同様。

表7と表8の①を比較すると、SAI_asの方がS1からS5にかけて、主格あるいは目的格での取り立てが比較的多く見られる。しかし、「その他」と「 ϕ 」の取り立てを見ると、倒置の有無に関わらず、この2項目が全体の多くを占めている。特に、Non_SAI_asもSAI_asも「 ϕ 」の割合が多い。こうした分布を踏まえて、「主格・目的格」での取り立て数の違いに有意差が見られるかを確認するため、Non_SAI_asとSAI_asの①と③を対象にフィッシャーの正確確立検定を行った。¹² 検定結果は(12)である。

- (12) a. S1までの取り立て $\rightarrow p = 0.2496 > .05$
 b. S2までの取り立て $\rightarrow p = 0.3962 > .05$
 c. S3までの取り立て $\rightarrow p = 0.172 > .05$
 d. S4までの取り立て $\rightarrow p = 0.1732 > .05$
 e. S5までの取り立て $\rightarrow p = 0.1732 > .05$

(12)の通り、いずれの場合でも有意な差は確認できなかった。固有名詞を主語として持つas節を調査した結果、随意的なSAIが適用された場合の方が「主格・目的格」での取り立てが比較的多く見られるものの、as節内の主語名詞句を後続文でトピック性の高い格で取り立てるという文脈的機能を支持するまでの統計結果は得られなかった。¹³

4.1.2. 調査①の問題点

調査①の結果は、随意的な倒置の適用と、as節内の主語名詞句が後続文でトピック性の高い格として取り立てられる傾向との関連性が明確に示されたとは言えない結果である。しかし、固有名詞は代名詞に比べて新情報の可能性が高く、情報量も多い名詞句である。そのため、End-weightやEnd-focusが適用されやすく、これが倒置の要因として働いている可能性が高い。これは、3.2.1節の表1・2の総頻度の違いにも表れているが、as節の主語が固有名詞の場合は、End-weightあるいはEnd-focusによってSAIが適用されることが一般的で、この種のSAI_asは有標な構文と言えないのではないだろうか。このことを踏まえると、調査①は情報量の多い固有名詞を扱っているため、随意的なSAIの適用がどれほど後続文での主格・目的格での取り立てに貢献しているのかははっきりと表れにくい環境にあったという問題がある。そのため、End-weightやEnd-focusが適用され

¹² 検定はR studioを使用した。なお、フィッシャーの正確確率検定を用いたのは小林(2017: 151)で指摘されているように、カイ二乗検定は「クロス集計表に小さい値が含まれている場合に、計算結果が不正確」になるからである。

¹³ 査読者の一人からプロソディおよび他の英語の変種の場合についてのご指摘があったが、テキストデータのみからプロソディや話者(書き手)の出身地の特定は困難であるため今後の課題とした。

にくい環境の中で、随意的な倒置の適用と格の取り立ての関連性を分析することが必要である。よって、4.1.3 節では情報量が固有名詞よりも少ない人称代名詞を主語として含む as 節を分析する。

4.1.3. 調査②：as + 人称代名詞 + 助動詞の場合

4.1.2 節で指摘した問題点を踏まえ、人称代名詞を主語として持つ as 節の S1 から S5 までの格の取り立て分布を調査した。Non_SAI_as の調査結果が表 9 であり、SAI_as の調査結果が表 10 である。

表 9：Non_SAI_as(人称代名詞) の S5 までの取り立て分布

取り立て項目	S1 まで	S2 まで	S3 まで	S4 まで	S5 まで
① 主・目	9 (17.3%)	15 (26.3%)	19 (31.1%)	21 (33.9%)	22 (34.9%)
② その他	12 (23.1%)	21 (36.8%)	23 (37.7%)	23 (37.1%)	23 (36.5%)
③ ϕ	31 (59.6%)	21 (36.8%)	19 (31.1%)	18 (29%)	18 (28.6%)
合計	52 (100%)	57 (100%)	61 (100%)	62 (100%)	63 (100%)

表 10：SAI_as(人称代名詞) の S5 までの取り立て分布

取り立て項目	S1 まで	S2 まで	S3 まで	S4 まで	S5 まで
① 主・目	20 (32.8%)	29 (43.9%)	32 (46.4%)	35 (47.9%)	36 (48%)
② その他	23 (37.7%)	28 (42.4%)	29 (42%)	30 (41.1%)	32 (42.7%)
③ ϕ	18 (29.5%)	9 (13.6%)	8 (11.6%)	8 (11%)	7 (9.3%)
合計	61 (100%)	66 (100%)	69 (100%)	73 (100%)	75 (100%)

表 9 と表 10 を見ると、ここでも S1 から S5 を通して SAI_as の分布にトピック性の高い格 (① 主・目) で取り立てる傾向が認められる。この場合も①と③の項目間で有意差があるかどうかを確認した。

- (13) a. S1 までの取り立て → $p = 0.009 < .05$
 b. S2 までの取り立て → $p = 0.004 < .05$
 c. S3 までの取り立て → $p = 0.008 < .05$
 d. S4 までの取り立て → $p = 0.009 < .05$
 e. S5 までの取り立て → $p = 0.007 < .05$

(13a) から (13e) のすべてで有意差が見られた。これは、SAI_as には S1 から S5 までの文脈において、主格・目的格での取り立てが多く見られることを示している。人称代名詞が End-weight を固有名詞よりも受けにくいことを考えると、表 10 の SAI_as には、その主語名詞句をトピック性の高い格で後続文脈に導入する文脈的機能があることがはっきりと表れているといえる。また、こうした取り立ての特徴は、SAI_as の主語名詞句に

は単に焦点が当たっているだけではないことを示唆しており、End-focus 以外の要因も随意的な SAI に関与していることが分かる。

表 9 と表 10 の分布において特徴的な点は、倒置が適用された表 10 において、それぞれの文でトピック性の高い格の占める割合が「 ϕ 」よりも多いことである。例えば、表 9 の S1 では「主・目」の占める割合は S1 全体 52 件のうち 9 件 (17.3%) だが、S1 全体の半分以上は「 ϕ 」が占めている。一方、表 10 の S1 では「主・目」の取り立ては S1 全体 61 件のうち 20 件 (32.8%) を占め、「 ϕ 」は 18 件 (29.5%) となっている。また、倒置が適用されていない表 9 に比べて、「主・目」の取り立て率が総じて高く、「 ϕ 」が抑えられている。加えて、表 9 では「主・目」の取り立てが S2 まで全体 57 件中 15 件 (26.3%) であり、「 ϕ 」の 21 件 (36.8%) よりも S2 まで全体の取り立て率において占める割合が少ない。対照的に、表 10 では、「主・目」の取り立てが S2 まで全体 66 件中 29 件 (43.9%) であり、「その他」の取り立てよりも高い比率を占めるように増加している。「 ϕ 」の割合は S1 よりも減少し、66 件中 9 件 (13.6%) に落ちている。最終的に S5 までの文脈では、「主・目」の取り立て率は S5 まで全体の取り立て率の半分近くを占めるまでになっている。

4.1.1 節での固有名詞を対象とした調査では明らかにならなかった Non_SAI_as と SAI_as の格の取り立ての違いが、人称代名詞を対象とする調査で明らかになった。人称代名詞を主語として持つ as 節に随意的な SAI が適用された場合は、後続文で as 節内の主語をトピック性の高い主格あるいは目的格で取り立てる傾向が確認された。この結果は、as 節に適用される随意的な倒置が、従来指摘されてきた End-weight や End-focus 以外の第 3 の要因にも左右されることを示唆している。すなわち、as 節の随意的な SAI は後続文でその主語をトピック性の高い格で具現させるために適用されていると考えられる。

4.2. トピックの展開：‘Topic persistence’ の観点から

本節では、as 節内の主語名詞句が S1 から連続して取り立てられている例を対象に、SAI_as と Non_SAI_as の場合で ‘topic persistence’ (以下 TP) の違いがあるかどうかを検討する。Givón (1983: 14) によれば、‘topic persistence’ は “Most directly it is a reflection of the topic’s *importance* in the discourse, and thus a measure of the *speaker’s* topical intent” と説明されており、トピック性の高い格を取り立てるという as 節の文脈的機能を扱う本研究との関連性が高い。もし倒置が適用された場合の方が TP の数値が高ければ、それだけ倒置した主語名詞句が文脈内で重要なトピックであると書き手に認識されていることになる。これによって、SAI_as が後続文脈のトピックに関与する文脈的機能を持つことを裏付けることになる。この TP の計測方法だが、Myhill (1992) は以下の例を挙げて説明している。

- (14) Mary gave me a new tie. It was very nice. She had bought it the day before.

(15) She got up and walked out the door. She was really upset. (Myhill 1992: 36)

(14) において、Mary の TP は直後の文にそれを指す要素が現れていないためゼロである。一方、a new tie は直後の文と 2 つ目の文で it として現れているため 2 と算出される。TP は必ずしも明示的にトピック要素を指すものが現れている必要はなく、(15) のように and で等位接続され、主語 She が現れていなくとも、トピックが続いていると考える。よって、(15) の She の TP は 2 ということになる。本稿では、明示的に現れているかどうかに関わらず、トピック性の高い主格あるいは目的格であると認定できればトピックが継続しているとし、「その他」の格であればトピックが途絶えていると判定することにする。¹⁴ また、4.2.2 節で見ると、後続文で主節主語をメンバーの一部として we という形でまとめて取り立てる場合や、as 節および S1 で we が主格に現れ、後続文の主語位置に I が現れた場合(その逆も同様)もトピックが継続している例として分析している。

4.2.1. データ全体の ‘topic persistence’

まずデータ全体の TP の傾向を確認する。表 11 は固有名詞を主語に持つ場合と人称代名詞を主語に持つ場合に as 節を分け、TP を調査した結果をまとめたものである。表 11 中の TP1 は as 節から S1 までトピックが継続しており、TP が 1 であることを示している。同様に、TP2 は S1 から S2 まで、TP3 は S1 から S3 まで、TP4 は S1 から S4 までトピックが継続していることを表している（括弧内では主格と目的格の内訳を記載。合計の比率は 50 件中の比率である。）。

表 11：各 as 節の ‘topic persistence’ の件数

	項目	TP1	TP2	TP3	TP4	合計
固有名詞	① Non_SAI_as	5 (主 4; 目 1)	0	0	0	5 (10%)
	② SAI_as	6 (主 6)	2 (主 2)	1 (主 1)	0	9 (18%)
人称代名詞	③ Non_SAI_as	5 (主 5)	3 (主 3)	1 (主 1)	0	9 (18%)
	④ SAI_as	12 (主 9; 目 3)	6 (主 6)	1 (主 1)	1 (主 1)	20 (40%)

¹⁴ 査読者の一人から、「その他」の格であればトピックが途絶えているという判定は少々強すぎるのではないかと、あくまで傾向的な問題なのではないかという主旨のご指摘があった。本研究では 3.3.1 節で述べたように Givón (1990) の枠組みで格とトピック性の関係を捉えているため、「その他」の格に関してはトピックが途絶えていると認定することにした。しかしながら、「その他」であってもトピックが続いている場合もあると考えられるため、今後データを精査し、随意的な倒置が適用された場合とそうでない場合とで違いが見られるかどうかを検討していきたい。また、「その他」の格としてまとめてしまったものの中にも、例えば、補部節の主格などのようにトピック性の高い要素として認定できる可能性があるものもあるため、今後先行研究を精査し、「その他」の格の具現についてより詳細な分析ができるようにしたいと考えている。

表 11 から明らかなように、④のデータ（人称代名詞を主語に持つ SAI_as）が TP の件数と全データ（50 件）に占める比率が最も多い（50 件中 20 件）。特に、TP1 の件数が①②③よりも顕著である。また、最も広い文脈での TP (TP4 まで) が認められるのも④である。この結果から、人称代名詞を主語に持つ as 節に SAI が適用された場合は、①②③の環境の as 節よりも広範な TP が見られることが分かる。次節では、TP が S2 以降にも認められるテキストにおけるトピック展開を中心に検討する。

4.2.2. ‘Topic persistence’ が 2 以上のトピックの展開パターン

S1 から S2 以降連続して取り立てている例（すなわち、TP1 以外の例）は、表 11 ①では 0 件、表 11 ②では計 3 件（TP2 が 2 件、TP3 が 1 件）であり、SAI が適用された場合のみ TP2 以上の例が見られた。人称代名詞を主語に持つ場合には、表 11 ③では 4 件（TP2 が 3 件、TP3 が 1 件）、表 11 ④では 8 件（TP2 が 6 件、TP3 と TP4 が 1 件）であり、この場合も SAI が適用された例の方が多かった。

まず、固有名詞を主語に持つ①②の as 節を見てみよう。この種の as 節では、(16) のように倒置した主語名詞句が人称代名詞で主格として取り立てられるパターンや、(17) のように主節主語と組み合わせさせて後続文の主格で取り立てられるパターン、(18) のように複数個 as 節が現れ、倒置した主語名詞句が後続文の主格で取り立てられるパターンが見られた（例文中の囲みは主格での取り立てを示す。また、[...] は省略箇所である。）。

- (16) [S1] 主 → [S2] 主（主語 she が省略）→ [S3] φ → [S4] φ → [S5] 目
 [...] Secretary Baird became concerned, as did Lucy. [S1] She [=Lucy: KT] was like a mother to the club and [S2] admonished the suspect members to cease all activities that might tarnish the Institution’s reputation. [S3] They all greatly admired Baird and [S4] felt especially privileged to have him as a mentor. [S5] So one day they somberly presented Lucy with a basket of hens (proof that they had solved the problem of egg excess) and a promise to curtail any other kind of excess.¹⁵

(COCA: magazine: E. Park 1993 *Around the Mall and Beyond* [Smithsonian])

- (17) [S1] 主 → [S2] 主 → [S3] φ → [S4] 主
 I’d grown cautious after that, as had Teri. [S1] We were wary, and protective

¹⁵ “(proof that they had solved the problem of egg excess)” の丸括弧は COCA のデータではハイフンになっているが、元のデータでは丸括弧が用いられているため修正している。元のデータは以下 URL の 8 頁、上から 19–20 行目で確認できる (<http://www.baird-bard-beard.org/BB/downloads/Volume6-December1995.pdf>) [最終アクセス日：2019 年 10 月 8 日]。

of each other, and [S2] sometimes we behaved very badly as a result. [S3] I remember one night in particular. [S4] We were at a party. [S5] There was a man I'd met but didn't know well.

(COCA: magazine: K. Edwards 1994 *The Moon Before Dusk* [Ms.])

- (18) [S1] 主 → [S2] 主 → [S3] 主 (主語 they が省略) → [S4] φ → [S5] φ
 I think things went well, he answered the questions comprehensibly as did General Myers, as did Mr. Grossman. [S1] They were available for hours; [S2] they sat there and [S3] answered every question that came to them. [S4] And I think there are a number of things that we don't know. [S5] We don't know exactly how this new government will come about but [...]

(COCA: spoken: 2004 *PBS_Newshour*)

as 節を基準とすると各例の TP は (16) と (17) では 2、(18) では 3 となる。これに対して、固有名詞を主語に持つ Non_SAI_as では S1 で取り立てられていても、S1 までで文脈が終わっていたり (5 例中 4 例)、(19) のように途中で TP が途切れていた (// は改行を示す)。

- (19) [S1] 主 → [S2] φ → [S3] 主 → [S4] 主 (主語 Dell が省略) → [S5] φ
 We have Red Hat on our price list, as Dell does. [S1] Dell has Solaris on their price list, as we do. [S2] We have a complete Web services stack. [S3] They [=Dell: KT] have to go out and [S4] buy it. [S5] I'm not quite sure how it's moving away from us. // (= (11))

次に、人称代名詞を主語に持つ Non_SAI_as を見てみよう。この場合には、表 11 ③の TP2 と TP3 の件数を合わせた 4 件中 3 件で deictic center である I が使用されていた。トピック展開パターンとしては、(20) のように S2 までで主格として取り立てられるパターンが 3 件。(21) のように S3 までトピックを継続している例が 1 件であった。各例の TP は (20) で 2、(21) で 3 である。

- (20) [S1] 主 → [S2] 主
 Teachers are passionate about this method of teaching music, as I am. [S1] However, in examining my lived experience as a music teacher, I confronted some of my reservations about the way in which this method is interpreted and taught. [S2] I believe these reservations need to be addressed if Kodaly-based music education is to be successful in the new millennium. Kodaly-Based Music Programs//

(COCA: academic: P. DeVries 2001 *Reevaluating Common Kodaly Practices*)

[Music Educators Journal])

- (21) [S1] 主 → [S2] 主 → [S3] 主 → [S4] φ → [S5] φ

I remember that he wore green sweat pants, as I did, was a little heavier than I, and was an only child, as I was. [S1] I remember him as if in a momentary flash: in mid-step, on the stairs, turning. [S2] I can not [sic] remember a single word. [S3] Neither can I recall his pre-pubescent voice. [S4] Was he quiet and sparing of words? [S5] Hardly, Of course [sic], not talkative either.

(COCA: fiction: 著者不明 1993 *Via Regia* [Literary Review])

次に、人称代名詞を主語に持つ SAI_{as} を見てみよう。この形式では、(22) のように [S1] 主 → [S2] 主のパターン（つまり TP2）が、表 11 ④の TP2、TP3、TP4 の件数を合わせた全 8 件中 6 件で見られ、最も多かった。

- (22) [S1] 主 → [S2] 主

So I think when Bartlet goes, as do I. [S1] I think that's my man in the White House. [S2] And I think after that, we all go back to the public sector.
// (COCA: spoken: 2004 *PBS_Tavis*)

また、(23) のように as 節内の主語名詞句が S1 で疑問修辭文の中で取り立てられ、S2 でその主語名詞句の行動が描写されるパターンも見られた。(23) は TP が 3 の例だが、これは全 8 件中 1 件のみであった。

- (23) [S1] 主 → [S2] 主 → [S3] 主（主語 I が省略）

I think that the service charge for theater tickets is offensive, and I wish more people would complain to the theater owners, as have I. [S1] If I can order an airline ticket without a service charge and still be able to cancel or exchange it, why can't I do the same with theater tickets? [S2] And, yes, I did go to the box office and [S3] buy the tickets for \$15 less! //

(COCA: news: 著者不明 1998 *Letters to Datebook* [San Francisco Chronicle])

人称代名詞を主語に持つ SAI_{as} で最も特徴的なパターンは、we → I のパターン (24) や I → we (25) のパターンである。TP2 以上のデータでこの種のトピック展開が見られた例は人称代名詞を主語に持つ SAI_{as} のみであった。このパターンに該当する例は全 8 件中 2 件確認された。

- (24) [S1] 主（主語 we）→ [S2] 主（主語 I）→ [S3] φ → [S4] φ → [S5] φ

The surface of the planet is mostly water, as are we. [S1] At least occasional-

ly, [we] ought to be able to drink any trailside or roadside water we happen upon. [S2] [I] always like the scene in Western movies when cowboys on a hot and dusty trail drive finally reach the river they've been longing for—the Arkansas River, or maybe the Platte—and [S3] they ride right into it and [S4] fall from their horses and [S5] drink and whoop and drink again and pour water on each other from their hats.

(COCA: magazine: P. Jaret 2003 *What's in the Water?* [Backpacker])

(25) [S1] 主 → [S2] 主 → [S3] φ → [S4] φ → [S5] φ

He has his own world around him, as do I. [S1] [We]re both very opinionated about our work, and [S2] [we] are both very strong people. [S3] There are times when that is the best, most amazing thing in the world, and then times when that also makes things difficult. [S4] Here's the thing with relationships that nobody tells you: [S5] You're not going to find one person where everything is always going to be perfect—that's bull.

(COCA: magazine: L. Berger 2010 *Jennifer "I don't have to be only one thing"* [Redbook])

(24) では、SAI が適用された as 節によって we が談話内に導入され、S1 のトピック位置に具現している。S2 では、we の構成員である I がトピック位置に現れている。(25) では、as 節によって談話内に I が導入され、主節主語 He と as 節内の主語 I が一緒になって we として S1 と S2 に具現している。

さらに、(26) のように S4 まで主格の取り立てが見られる例も観察された。このパターンは全 8 件中 1 件のみであるものの、表 11 ①②③の他の as 節には見られなかった。

(26) [S1] 主 → [S2] 主 → [S3] 主 → [S4] 主 (主語 I が省略) → [S5] φ

He was extremely happy about the outcome, as was I. [S1] [I] asked him not to tell anyone about the whole affair, fearing that if word got around, some people back there might think I was either a doctor or a houngan and come asking for help with this illness or that. [S2] Whatever the illness might turn out to be, [I] had nothing to offer but hot salt. [S3] [I] saw Lherisson later in the day and [S4] told him what had happened. [S5] He said unequivocally that it was the heat that helped break the abscess.

(COCA: academic: H. Courlander 1990 *Recollections of Haiti in the 1930s and '40s* [African Arts])

以上のように、SAI_as には Non_SAI_as よりもトピック性の高い格での取り立てが多

く、また、トピックがどれだけ後続文脈で続いているかの観点から見ても、SAI_as(特に人称代名詞を主語に持つ場合)は、より広い範囲の文脈でトピックを継続させていることが確認できた。

5. 有標構文と as 節の類似点

本節では、4節で検討した人称代名詞を主語に持つ SAI_as の特徴が、Lambrecht (1994) で示されている左方転位文や Huddleston and Pullum (2002) で取り上げられている場所句倒置に見られる特徴と類似していることを主張する。

5.1. ‘topic-promoting constructions’

Lambrecht (1994) は、提示の there 構文と左方転位文に関して、文脈の中で両構文がどのような機能を果たしているのかを記述している。

- (27) Once there was a wizard. He was very wise, rich, and was married to a beautiful witch. They had two sons. The first was tall and brooding, he spent his days in the forest hunting snails, and his mother was afraid of him. The second was short and vivacious, a bit crazy but always game. Now the wizard, he lived in Africa. (Lambrecht 1994: 177)

Lambrecht (1994: 182-183) によれば、(27) の冒頭にある提示の there 構文は新情報を表す名詞句 (a wizard) を文脈内に導入し、その名詞句が後続文のトピック位置に生起することを可能にする文脈的機能を有するとしている。一方、左方転位文の場合は、一度トピックとしての地位を失った a wizard が the wizard の形で再び現れ、代名詞 he の形でトピックの地位を取り戻していることから、ここでの左方転位文は元々トピックであった名詞句に再びその地位を戻す働きをしていると分析している。これを踏まえ Lambrecht (1994) は、新情報を表す名詞句を文脈に導入し、後続文でトピック位置に生起できるようにする提示の there 構文の機能と、元々トピックであった名詞句に再びトピックの地位を与える左方転位文の機能を論拠として、これらを “topic-promoting constructions” (Lambrecht 1994: 177) と呼んでいる。

5.2. 随意的な場所句倒置に見られる後続文脈との関係性

Huddleston and Pullum (2002: 1387) は、(28a) の場所句倒置文が物語の文脈で使われた場合に、後置した名詞句で表されている情報が後続文脈のトピック位置に生起した場合、(28b) は自然だが、前置詞句の情報 (a little wooden house) が続いた場合の (28c) は自然なつながりにならないと述べている。

- (28) a. In a little wooden house in the middle of a deep forest lived a solitary woman who spent her days reading and gardening.
- b. She had recently won the lottery, and had hidden the money under her mattress.
- c. It was badly in need of repairs, and everyone who saw it wondered whether it could hold up another year with its broken shutters and fractured foundation. (Huddleston and Pullum 2002: 1387)

さらに、こうした違いが出るのは (28a) のように有標の形を取る時だけであり、倒置が適用されない場合は (28b) でも (28c) でも自然であるとしている。

5.3. 随意的な SAI が適用された as 節との共通点

4 節で述べたように、人称代名詞を主語に持つ SAI_as には、(i) 旧情報を示す人称代名詞が後続文脈でトピック性の高い格で取り立てられ、(ii) Non_SAI_as よりも TP が高く、倒置した主語名詞句が後続文脈のトピックとして生起している。(i) の特徴は、(27) の左方転位文の旧情報を示す名詞句を再びトピックの地位に戻す機能と類似している。Lambrecht (1994: 183) によれば、(27) の左方転位文は a wizard という名詞句を ‘accessible’ から ‘active’ な段階に高める役割を果たしており、それによりトピックの地位を取り戻しているとされているが、当該 SAI_as でも倒置が節内の主語名詞句に適用されることで、トピックとして認識されやすくなるということには、同様の談話的機能が関係していると思われる。¹⁶ そして、トピックとして再認識されるだけでは終わらず、(28a) のように後置した主語名詞句が、後続文脈のトピックとして具現するという特徴があるといえる。加えて、倒置が適用された場合に、後置した主語名詞句が後続文脈のトピックに生起する方が好まれるという点でも共通している。また、3.2 節で述べた有標性の観点から考えると、こうした文脈的機能に SAI が深く関与しているのは、人称代名詞を主語に持つ as 節であると思われる。

(27) や (28a) で例示した構文と随意的な倒置が適用された as 節は、交換可能な構文というわけではないため、全く同じ条件で使用されるとは言えない。しかし、有標構文が持つ特徴という観点から見直せば、構文内の名詞句を移動させ、有標性を際立たせることで文脈内のトピックとして設定する働きを持つ点で、類似した構文機能を備えていると考えることができる。

¹⁶ Lambrecht (1994: 165) では topic である要素を特定する際にかかる認知負荷を 5 段階に分けており、最も負荷が少ない段階を ‘active’ とし、その次に負荷が少ない段階を ‘accessible’ としている。

6. 結論

本稿では、COCA から抽出した節末に位置する as 節のデータを基にし、後続文脈における格の取り立てという観点から随意的な SAI が適用された as 節の文脈的機能と特徴を明らかにした。End-focus や End-weight というこれまで指摘されてきた SAI の要因だけでは語れない第 3 の要因があることが判明した。つまり、後続文の格の具現という視点から文脈単位で再検討したことによって、随意的な SAI が適用された場合の方が、倒置が適用されない場合よりも、後続文脈に as 節内の主語名詞句を主格や目的格といったトピック性の高い格で取り立てる傾向があることが分かった。また、この格の具現化現象は、人称代名詞を主語に持つ as 節の場合に顕著であり、SAI が適用されない場合の取り立てとは有意差が見られることを確認した。最後に、この特徴を踏まえて随意的な SAI が適用された人称代名詞を主語に持つ as 節が Lambrecht (1994) の “topic-promoting construction” (特に左方転位文) や Huddleston and Pullum (2002) の場所句倒置に見られる特徴と類似した点が観察できることを指摘した。

参考文献

- 荒木一雄・安井稔 (編). 1992. 『現代英文法辞典』東京：三省堂.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Brezina, V. 2018. *Statistics in Corpus Linguistics: A Practical Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culicover, P. W. 2013. *Grammar and Complexity: Language at the Intersection of Competence and Performance*. Oxford: Oxford University Press.
- Dorgeloh, H. 1997. *Inversion in Modern English: Form and Function*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, T. 1983. “Topic Continuity in Discourse: An Introduction.” In T. Givón (ed.) *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*, 1–41. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, T. 1990. *Syntax: A Functional-Typological Introduction* (vol. II). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Green, G. M. 1980. “Some Wherefores of English Inversions.” *Language* 56 (3), 582–601.
- Hand, D. J. 2008. *Statistics: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小林雄一郎. 2017. 『R によるやさしいテキストマイニング』東京：オーム社.
- Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge: Cambridge University Press.

Myhill, J. 1992. *Typological Discourse Analysis: Quantitative Approaches to the Study of Linguistic Function*. Oxford: Blackwell.

大竹芳夫. 2016. 「英語の節・文連結を表す諸構文に関する記述的研究」、『言語の普遍性と個別性』7 (新潟大学大学院現代社会文化研究科「言語の普遍性と個別性」プロジェクト)、1-10. <<http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/handle/10191/40563>>

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

滝沢直宏. 2017. 『ことばの実際 2 コーパスと英文法』東京：研究社.

Corpora

Davies, M. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English: 560 Million Words, 1990-present*. <<https://corpus.byu.edu/coca/>>

The Corpus of Contemporary American English の full text 版 (4 億 4,000 万語)